

# 琉球大学学術リポジトリ

## [調査報告]学生企画のフィールドワーク型地域実習に関する報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球医学会 公開日: 2012-12-11 キーワード (Ja): キーワード (En): community-based medical education, rural areas, fieldwork, student-led program, interchange 作成者: 羽柴, 淳, 川木, 詠美, 上原, 周悟, 座間味, 知子, 武村, 克哉, Hashiba, Jun, Kawaki, Emi, Uehara, Shugo, Zamami, Tomoko, Takemura, Katsuya メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002016251">http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002016251</a>

## 学生企画のフィールドワーク型地域実習に関する報告

羽柴 淳<sup>1)</sup>, 川木 詠美<sup>1)</sup>, 上原 周悟<sup>1)</sup>, 座間味 知子<sup>1)</sup>, 武村 克哉<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>琉球大学医学部医学科, <sup>2)</sup>琉球大学医学部附属病院地域医療部

## Report of student-led fieldwork in the community

Jun Hashiba<sup>1)</sup>, Emi Kawaki<sup>1)</sup>, Shugo Uehara<sup>1)</sup>,  
Tomoko Zamami<sup>1)</sup> and Katsuya Takemura<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>Faculty of Medicine, University of the Ryukyus

<sup>2)</sup>Division of Community-based Medicine and Primary Care, Ryukyu University Hospital

### ABSTRACT

**INTRODUCTION:** Health workforce shortages are major issues in rural areas. Japanese medical schools have implemented numerous community-based medical educations aimed at increasing medical graduates' willingness to work in rural areas. However, these educations were usually initiated by educators, and there is considerable doubt whether they considered the needs of students engaged in those programs. Under the support of University of the Ryukyus, we conducted a community-based medical education program in May 2011, in which each participating student was assigned to, and performed fieldwork in one of 9 rural areas: 2 northern regions of Okinawa Main Island and 7 isolated islands around the island. This study assessed the impacts of the student-led program on students' notion, appreciation and attitudes of community-based medicine. We also explored the importance of interchange with students of different universities and faculties who have more or less interest in community healthcare.

**METHODS:** In the study, questionnaires were distributed to 39 students who were engaged in the fieldwork before and after the program; 35 (89.7%) responded. Students were asked about their preferred location for future practice, their beliefs about regional healthcare, the impact of the program on their understandings, the significance of interchange among students of different backgrounds who share a common interest in community-based healthcare, and the roles for students to play in rural healthcare.

**RESULTS AND CONCLUSION:** Almost all the students showed moderate-to-marked willingness to work in rural areas after postgraduate practice. Many students indicated that they enriched their understandings through the fieldwork. Moreover, some of them nourished positive attitudes to improve the current situations of underserved community healthcare by making themselves integrating with rural communities. During the program, most students felt that they learned diversified values in regional healthcare, different medical problems and countermeasures in different regions. Although the report was not subjectively-assessed due to the limited sample size, biased sample, and not-well-organized analytical process, the result suggests that student-led medical program can have the potential to positively impact on students' interests in community-based healthcare. *Ryukyu Med. J.*, 30(1~4) 61~67, 2011

Key words: community-based medical education, rural areas, fieldwork, student-led program, interchange

## 諸 言

昨今地域医療を担う医師確保が急務となっており卒前医学教育の重要性が注目されていることから、地域密着型の体験学習など地域医療教育に関する様々な取り組みがなされてきた<sup>1-3)</sup>。しかしながら、多くの場合、学習プログラムは教員主導で策定されていることが多く、学習主体である学生の視点が最大限反映されているかという点については懐疑的にならざるを得ない。地域医療を学ぶには大学主体で提供される講義や実習だけでは限界があり、その地域の特性や医療を学生の視点で捉えることが重要と考える。

今回、琉球大学「多様な地域医療教育プログラム構築のための連携教育の推進」プロジェクトの一環として「第一回 地域医療を学ぶための学生セミナー2011 in おきなわ」(以下、学生セミナーと記す)と題したセミナーを学生主導で企画し、2011年3月9日～11日の日程で沖縄本島北部地域および周辺離島の8地域にてフィールドワークを実施した。ここでは地域医療を学ぶために病院や診療所内で学ぶだけでなく、地域社会と積極的に関わっていくことによって地域社会への理解を涵養するための活動をフィールドワークと定義している。地域医療に興味を持つ医学部、薬学部の学生を対象に学生セミナーの参加希望者を募集し、県内外の10大学から39名の学生を選抜した。参加学生は各地域へ振り分けられ、診療所内で医療業務を観察するだけでなく診療所を取り巻く地域社会へと活動範囲を広げ、介護老人保健施設の見学や保健師の活動への同行、住民や小中学生との交流などの様々な活動を体験した。

本報告では、フィールドワークが学生の地域医療に対する理解や考え方、姿勢にどのような変化を及ぼすか評価することを目的とする。また、地域医療に興味を持つ学生が大学や学部の壁を越えて交流する意義について考察する。

Table 1 参加学生の内訳

性別		出身県		(人)
男	女	県内出身	県外出身	
19	20	22	17	
所属大学		所属学部		
琉球大学	他大学*	医学部	薬学部	
21	18	36	3	
年次				
1年生	2年生	3年生	4年生	
16	13	7	3	

\*他大学の内訳(人数)(徳島大学(6), 自治医科大学(3), 秋田大学(2), 旭川医科大学(2), 大阪薬科大学(1), 神戸学院大学(1), 鈴鹿医療科学大学(1), 三重大学(1), 和歌山県立医科大学(1))

## 調査方法

フィールドワークに参加した学生39名全員を調査対象とした。参加学生の男女比はほぼ同じ、そして出身地、所属大学はそれぞれ沖縄県内、琉球大学が過半数を占めており、参加学年は臨床科目を学んでいない低学年の学生が約7割を占めた。所属学部は9割以上の学生が医学部(医学科)、残りが薬学部の学生であった(Table 1)。フィールドワーク実施期間は2011年3月9日～11日の実質2日間であり、安田・辺土名・今帰仁の沖縄本島北部の3地域、ならびに沖縄本島周辺離島の阿嘉島・粟国島・伊江島・伊是名島・久米島、計8地域にてフィールドワークを実施した。学生数は一地域あたり4人をベースとしているが、直前に欠員が出た伊江島では3人で、また今帰仁では12人の学生を3グループに分け、1グループ4人で活動を行った。フィールドワークの活動内容は、各グループの学生リーダーを中心となりフィールドワーク受入先とそれぞれ調整を行ったため、各地域によって活動内容は様々である(Table 2)。

フィールドワークの前後で記名式自記式質問紙調査を行った。調査項目は以下の計6問であり、フィールドワーク前後で同一内容の調査を行った(Table 3)。回答方法には多肢選択と自由回答を用い、多肢選択の場合は、「非常にそう思う」、「ややそう思う」、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」の中から一つを選択させるようにした。また選択回答で得られた結果はウィルコクソン検定により分析し、フィールドワーク前後で有意差の有無を判断した。自由回答の質的分析は、主たる研究者3名で質問ごとの回答内容をフィールドワーク前後で比較検討、分類し、タイトルをつけた。ただし、ここではフィールドワーク前後で個々の回答者に着目して回答内容の変化を分析した訳ではなく、全体的な回答傾向の変化に着目している。また、各分類をよく表現すると主たる研究者が判断したコメントをそれぞれ2つ程度抜粋したが、当研究では抜粋に際し明確な基準は設定していない。

## 調査結果および考察

フィールドワーク実施前後のアンケートは参加学生39名中35名(89.7%)から回答を得た。

### I. 地域医療に対する理解や考え方、姿勢の変化

Q1「将来、離島・僻地医療に携わりたいと思うか?」、Q3「フィールドワークによって地域医療への理解が深まると思うか?」の質問には、フィールドワーク前にて既に多くの学生が「非常にそう思う」あるいは「ややそう思う」と回答しており、フィールドワーク前後の有意な変化はなかった。(Fig. 1, Fig. 2)。これは、フィールドワークへ参加した学生は元来地域医療、離島医療に

Table 2 フィールドワーク別の活動内容

実習地 (人数)	阿嘉(4)	粟国(4)	伊江(3)	伊是名(4)	久米島(4)	安田(4)	辺土名(4)	今帰仁(12)
診療所・ 病院	外来見学	外来見学	外来見学 救急搬送	外来見学	外来見学 (公立久米島 病院)	外来見学	外来見学 (歯科診療所・ 薬局含む)	外来見学
訪問診療	近隣離島への 往診見学							見学
デイケア・ 老人ホーム	介護体験	介護体験	介護体験	介護体験			介護体験	
保健 センター							見学	見学
保健師同行		家庭訪問	ヨガ教室体験		家庭訪問			
地域住民 との交流	子供達との 触れ合い 青年会との 懇親会	ゲートボール・ 断酒会参加		住民アンケート 実施 ゲートボール 参加	商店街・病院 待合室にて交流	住民アンケート 実施	住民アンケート 実施 グランドゴルフ 参加	
小中学生との 交流会	小学校訪問			中学校での 講演会			小学生への 健康教育	
公民館・役場					役場訪問	公民館訪問		
その他	村会議		医師による 参加学生向け 講義	社会福祉 協議会訪問	観光施設体験		消防署見学 中学校校長との 対談	講演会参加 畠の研修

Table 3 アンケート質問項目

- Q1 将来、離島・僻地医療に携わりたいと思いますか？  
 Q2 「離島僻地医療」についてどういうイメージを持っていますか？  
 Q3 フィールドワークによって地域医療への理解が深まると思いますか？また、その理由をお書き下さい。  
 Q4 「地域医療」とは何ですか？あなたの言葉で地域医療を説明して下さい。  
 Q5 フィールドワークを通じ、地域医療を学ぶために大学の壁を越えて全国の医学生が交流する機会は必要だと思いますか？なぜそのように思いますか？  
 Q6 地域、あるいは地域医療において学生が果たすべき役割は何だと思いますか？

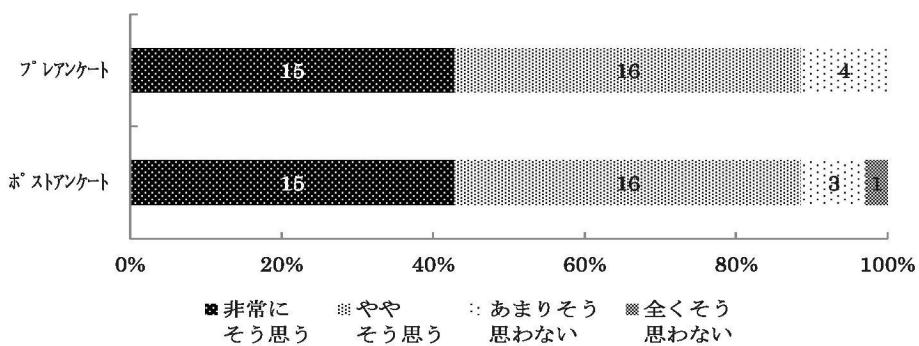


Fig. 1 フィールドワーク前後での Q1 の回答結果 (N=35).

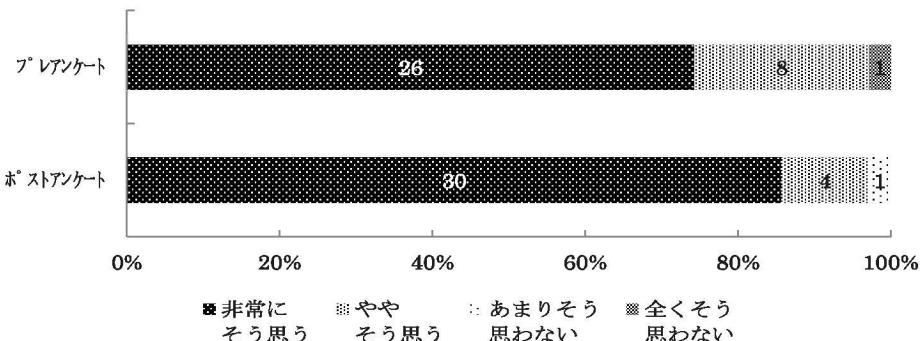


Fig. 2 フィールドワーク前後での Q3 の回答結果 (N=35).

Table 4 プレアンケートおよびポストアンケートにおける Q2 の自由回答の内容（一部抜粋）

## &lt;プレアンケート&gt;

## 医療従事者にかかる負担の大きさ

「医師、看護師が一人で全部仕事を行っている。」  
 「医療従事者の数自体が少なく自分の力量がより問われる気がする。」  
 「医師は自分一人のみなので、負担が少し大きい。」

## 地域住民との密な関係性

「地域の人と濃密な関係を築いている。」  
 「住民との境界線の引き方が難しい。」

## スキルアップ

「自分のステップアップ、スキルアップの場。」  
 「コミュニケーションや行政とのやり取りなど、一人だからこそ学べることが多い。」

## &lt;ポストアンケート&gt;

## やりがいや魅力のある医療

地域の方に本当に必要とされていることをひしひしと感じられる医療。」「体力的、精神的に過酷な医療だと思うが、そこでしか得ることができない貴重な経験は医師として大きく成長させてくれると思う。」

## 診療所と社会の関係性

「診療所の外の世界（社会）も含めて考える必要がある医療。」「地域・行政との関わりが重要。」「医師を中心に看護師や役場、学校そして住民が協力して成り立つもの。」

## 医療従事者へのバックアップ体制

「決して一人で寂しいものではなく、地域の人のバックアップや思いやりがあって成り立つ医療だと分かった。」「医師一人で朝から晩まで寝る間も惜しんで働くようなイメージを持っていたのだが、そういった地域ばかりでなく医師のことも考えてくれる地域があることを知り、やりがいのある仕事場というイメージを持った。」

Table 5 プレアンケートおよびポストアンケートにおける Q4 の自由回答の内容（一部抜粋）

## &lt;プレアンケート&gt;

## 地域・患者に合わせてカスタマイズされた医療

「地域医療とは医師と患者が二人三脚で医療を行っている状態だと思う。」「島の住人の一人一人持っている背景を把握した上で、それぞれの患者に適した治療を提案できる場所。またそうするべき場所。」

## 包括的な医療

「診療所、病院だけにとどまるのではなく、地域にとけこんで地域単位で医療を行う。」「地域を包括して病気の治療だけでなく、生活まで全てに影響を与えていく医療を展開していく。」

## &lt;ポストアンケート&gt;

## 様々な業種が協業

「医師や看護師の連携はもちろんのこと、事務員・保健師・ヘルパーなど様々な職業の方々が協力し合い、地域のニーズに合った医療をすること。」

## 医療従事者に求められる資質

「患者一人一人を診るのはもちろん、その地域全体の健康状態にも責任を持つため、医師として幅広い知識や視野、また人間性を要求される医療だと思った。」

## 地域に生きること

「医師が地域に生き、医療を提供することだと思う。今回医師としての先生より住民としての先生の一面を多く見てそのように思った。」

高い関心を持った集団であること、対象集団の標本数が35と少なかったことなどが原因として考えられる。しかししながら、Q2「離島僻地医療についてどういうイメージを持っているか？」、Q4「地域医療とは何か？」の

質問に対する自由回答を見ると、プレアンケートでは「地域住民との密な関係性」(Table 4) や「包括的な医療」(Table 5) で抜粋したコメントのように離島医療あるいは地域医療を抽象的に捉えるコメントが目立って

Table 6 プレアンケートおよびポストアンケートにおける Q3 の自由回答の内容（一部抜粋）

## &lt;プレアンケート&gt;

## 地域医療・地域社会を知ることができるため

「実際に体験することで視野が広がると思うし、住民や先生の方々から良い刺激を受けて地域医療へ関心が何らかの形で生まれると思う。」  
 「地域の現状をフィールドワークによって知ることにより、知識が増え、また考えさせられ、話し合いにより理解が深まると思う。」  
 「実際に島で暮らす住民の方々が感じている地域医療の問題点を知ることを通じて、テレビや新聞の情報では得られないありのままの現状に触れることができると思う。」

## &lt;ポストアンケート&gt;

## 地域医療へのニーズが分かるから

「どのような患者が来るか、どのような症例が多いかを先生に聞くことによって、地域医療で必要とされる知識・手技などが分かるから。」  
 「地域の人々が何を期待し求めているのか、またどのような不安を抱えているのかが分からぬと思うから。」

## 地域医療の現状・問題点を知ることができるため

「実際に見れば医療に関係する人々の動き、役割がわかる。」  
 「地域の医療だけでなく、行政・福祉の働きを理解することができたのはとても良かったと思った。」  
 「実際に地域に泊まってそこの人たちに話を聞いて距離を感じて、本当に医療というものが切実に必要とされていること、地域とはどういう状況にあるのかを感じることができるから。」

Table 7 プレアンケートおよびポストアンケートにおける Q6 の自由回答の内容（一部抜粋）

## &lt;プレアンケート&gt;

## 地域医療について知ること・考えること

「地域医療の現状を知ることで自分の役割を考えることができると思う。今はまだ思いつかないが、今回のフィールドワークを通じて見つけられたら良いと思う。」  
 「より早期の段階で地域医療に対して関心を持ち、その理解を深めるべきだと思う。」

## &lt;ポストアンケート&gt;

## 地域社会への貢献・還元

「（オプション企画として）名護高校で行った交流会のように、即効性はないにしても、医学を遠くにしか感じていなかつた高校生に医学生を通して医療・医学を身近に感じてもらうきっかけを作ることは素晴らしいことだと思った。その地域から医学部へ進学する人が出れば将来その地域の医療が変る流れを作ることが出来るかもしれないと思った。」  
 「地域を知るという一方通行の取り組みではなく、小・中・高校生や地域の方々に何か還元できることを探し、実行していくべきと感じた（今回のように見に講演会、塩のポスターなど）。また、参加しなかった学生への周知等も考えられる。」  
 「医師になる前の学生の目線は、地域住民の目線で物事を見、考える上で重要なと思う。住民側の目線にも立ってみることで、住民にとって何が必要なのかを知り、医療者側に提示していくことが大切だと思う。学生は住民の代弁者、もしくは住民と医療者の橋渡しのような存在になれると思う。」

## 学ぶ・知る・考える・周りに伝えることを通じてより良い医療を目指すこと

「よく学び、医学生としての知識と人としての常識を身に付け、地域について知り、次に外に出て地域の実情を見ることが大切だと思った。その学んだことを広く伝え、より良い地域医療の実現にはどのような医師が求められているか考え、そういう努力をすることが学生の果たすべき役割だと思った。」

いたが、ポストアンケートではそれらに加えて「医療従事者へのバックアップ体制」(Table 4) や「地域に生きること」(Table 5) のコメントのように直接医師の生活を間近で観たからこそ得られる、具体性を持ったコメントも見られるようになり、多くの学生が地域医療に対する理解を深めていたことが読み取れた。Q3「フィールドワークによって地域医療への理解が深まる理由」のプレアンケートでは「地域医療を知ること」という漠然とした理由が多数挙がっていたが、ポストアンケートではそこから一歩昇華させた「地域医療へのニーズが分か

るから」「地域医療の現状・問題点を知ることができるため」という意見を挙げる学生も見受けられた。彼らの中では地域医療のニーズや現状・問題点を知るために手段としてフィールドワークを捉えるようになったことが伺える(Table 6)。

また、Q6「地域、あるいは地域医療において学生が果たすべき役割は何か？」に対する自由回答では単に「地域医療について知ること・考えること」に止まらず、「学ぶ・知る・考える・周りに伝える」というように、学生自らが地域社会との積極的な関わり合いを求め、よ

Table 8 プレアンケートおよびポストアンケートにおけるQ5の自由回答の内容（一部抜粋）

## &lt;プレアンケート&gt;

考え方の多様性に触れ地域医療に対する理解を深めるため

「全国の学生が交流することでより多くの視点や考え方を得られ、地域医療への理解もより深まるのではないかと思う。」  
 「他大学の活動を知ることで、また刺激を受けることで、自分たちの活動がより良いものになっていくのではないか。医学部は交流が少ないように思えるので、少しでも多くの人と触れ合うことが大切だと思う。」

「地域医療の問題をその土地だけのものだけではなく、全国的に解決すべき課題として捉えることが大切だと思うので、全国の医学生が交流し意見交換しあうことは欠かせないのでないかと思う。」

## 仲間を得られるから

「参加者は皆、地域医療に興味を持って参加しているので、将来地域医療に携わる時に特に困った時など助け合う仲間になりそう。」  
 「全国に同じ志の人たちがいることを知るだけでも大きなエネルギーになる。」

## &lt;ポストアンケート&gt;

活動や取り組みを共有するため

「他大学での地域の小・中学生に対する取り組みの話や、他県の学生の地元の様子についての話、シンポジウムの発表のように他大学での活動について共有できることはいろいろ視野を広げるという点で良いことだと思う。また違う視点からの意見について知ることができる。」

## 大学・学部の枠を超えて交流できるから

「大学内で話し合う機会は重要だと思うが、それだけでは意味がない。他学部・他大学というより、多くの職種の人と関わることが重要になってくる。例えば医療従事者ではない社会人と地域医療について考えを話し合っても良いと思う。」

## 日本全体で地域医療を考える

「その地域、地域でのぶつ切りの医療というのは脆弱なものだと思う。日本全国で地域医療を捉えてこそ、全国の医療系大学生が力を合わせてこそ地域医療に勢いや活気が出てくると思う。」

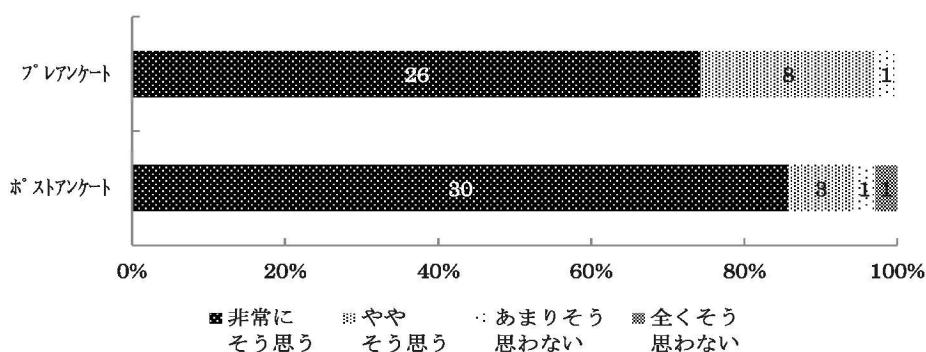


Fig. 3 フィールドワーク前後でのQ5の回答結果 (N=35).

り良い地域医療を目指そうとする主体的な意見が出たことは大きな収穫であろう (Table 7)。そして、小・中校生との交流会を通じて将来の医療の担い手を創出すること、地域住民の健康向上・増進に携わっていくことで「地域社会への貢献・還元」を図っていくこうとする方向性は、より良い地域医療へ向けた第一歩となり得るのではないかと考える。

## II. 学生間の交流の意義

Q5「フィールドワークを通じ、地域医療を学ぶために大学の壁を越えて全国の医学生が交流する機会は必要だと思うか？なぜそのように思うか？」の質問に対して、学生の多くは、身近な地域で醸成された狭小な価値観で地域医療を考えていく点に危うさを感じており、様々な

人間との交流機会を渴望していることが読み取れる (Table 8, Fig. 3)。他大学、他学部の学生との交流を通じて、地域医療に対する多様な価値観を得、異なる地域における地域医療の現状や様々な活動内容が学生間で共有されたこと、さらには地域医療に関わる問題を全国的な問題と捉えて共に取り組んでいく仲間作りの場を提供できたことを鑑みれば、学生セミナーを開催した意義は大きいと考えられる。

## III. 学生主導で地域密着型体験実習を企画する意義について

今回、学生セミナーの企画からフィールドワークの活動内容の決定まで学生が主体となって実習を主導してきた。これは、諸言でも述べたように、フィールドワーク

学習主体である学生の視点を最大限反映させたいという思いが原動力となっている。事実、地域住民と談話して医療に対する考え方伺ったり、学生が疑問に思うことを地域住民にアンケート調査することで地域医療を理解しようと試みたり、あるいは将来の地域医療の担い手として期待される地元の小中学生との交流会の場を設定して受験指導や健康指導を通じて少しでも医療に興味を持つてもらうべく働きかけるなど、学生の純粋な思いから地域医療を学び感じるための様々な活動が各フィールドワーク先で行われた。しかし今回、学生セミナーの開催に当たって調査準備に必要な時間や人員が十分確保できず、調査設計上、学生主導で学生セミナーを企画する効果を判断できるアンケートとなっていたいなかったことは反省すべき点として挙げられる。また、アンケート自由回答の質的分析では主題分析や内容分析などの分析手法が用いられておらず、収集データの妥当性や信頼性を保証するための手段も講じられていないため、今回の報告には研究者の主観が反映されている可能性は否定できず、一般化することはできない。とは言え、今回の報告は学生主導で地域実習を行うことの有用性について否定するものではなく、さらに調査研究を進める価値があることを示唆している。

### 結 語

学習者である学生が主体となりフィールドワークを企画、実施した学生セミナーのアンケート結果を報告した。地域医療実習の中で、小・中学生や地域住民との交流を

通じて学生から地域社会と関わっていくことは地域医療への理解のみならず学生の主体性を育む意味でも意義がある可能性がある。他大学・他学部の学生との交流は多様な価値観の醸成、地域医療の地域間差異の理解、他大学での活動内容の共有をもたらしたと言える。

### 謝 辞

琉球大学医学部医学教育企画室、附属病院地域医療システム学講座、地域医療教育開発講座、公益社団法人地域医療振興協会、そして、今回、フィールドワークを受け入れてくださった施設、地域の方々に深く感謝申し上げます。

### 文 献

- 1) 岩崎拓也、竹山宜典、伊木雅之、伊藤浩行、大柳治正、塩崎 均、松尾 理：地域医療実習による学生の意識変化と地域指向性との関連—和歌山県東牟婁郡串本町における地域医療教育—. 医学教育42 (2): 101-112, 2011.
- 2) 矢田一宏、阿部 航、加島 尋、野口 剛、宮崎英士、白石憲男、野口 隆：高大連携「ふるさと医療人材育成事業：地域医療を理解するセミナー」の経験とその評価、医学教育42 (4): 233-238, 2011.
- 3) 岡山雅信、梶井英治：地域医療臨床実習の感想や全般評価と関連のあった実習項目. 医学教育39 (4): 237-244, 2011.